



## 日本に登山を根付かせたウォルター・ウェストン（一八六一―一九四〇） 宗教行事であった日本の登山

一九二四年にエベレストの頂上を目指すイギリスの遠征の隊員として参加し、頂上付近で消息不明となったG・マロリーは生前に「なぜエベレストを目指したのか」と質問されたとき、「そこにエベレストが存在するから」という有名な返答をしたことが記録されています。この言葉が象徴するように、西欧社会の登山は未開の土地を探検するのと同様に、未踏の高山に挑戦するということを目標としてきました。

一方、日本では多数の山々は山岳全体が神体であり、それを山麓の里山と背後の奥山に区分し、里山は植物を採集し、動物を狩猟する場所として人々が日常生活で利用する一方、奥山は神聖な空間として山頂には神社を造営し、特別の時期にだけ入山して参拝する場所とされてきました。そのため山麓には拝殿を造営し、日常は山麓で参拝するというのが日本の伝統でした。この伝統が現在でも存続している山々は多数存在します。

筆者は山形の出羽三山で出羽修験を何度か体験したことがあります。早朝に谷川で沐浴して白衣の装束に着替え、最初に羽黒山頂にある出羽三山神社に参拝、そこから登頂して月山山頂にある月山神社本宮（図1）に参拝し、最後に湯殿山神社本宮に参拝するという行程でした。かつては女人禁制でした。これらは出羽三山だけの伝統ではなく、日本の高山の大半が神々の存在する特別な空間として、このように維持されてきました。



図1 月山神社本宮

ところが幕末から明治にかけて西洋の人々が日本に滞在するようになり、この伝統が崩壊していきます。一例として一八五九（安政六）年に来日、初代駐日公使となったイギリスのR・オールコックは日本国内を自由に旅行する特権を誇示することも目的に、翌年九月に富士登山を實行します。山頂では火口に礼砲を発射、イギリス国歌を斉唱、女王陛下を祝福してシャンパンで乾杯するなど、日本の伝統を無視するような登山でした。

来日した外人が打破した日本の伝統は登山の目的だけではなく、女性の登山を可能にしたことです。オールコックの後任として一八六五年から駐日大使になったH・パークスは一八六七（慶応三）年に夫人を同伴して富士登山をします。それまで干支が六〇年に一度の庚申の年のみ、日本の女性も中腹まで登山を許可されていましたが、パークス夫人の登山を契機に、明治政府は一八七二（明治五）年に女人禁制を解除します。

### 登山をスポーツにした英国男性

このような時代の変化を背景に、それまで宗教行事であった日本の登山をスポーツに変化させたイギリスの男性が登場しました。その人物ウォルター・ウェストンを紹介します。ウェストンは日本では江戸末期になる一八六一年にイギリス中部の都市ダービーに工場を経営する家庭の六男として誕生しました。地元の学校で初等教育を修了してからケンブリッジ大学クレア・カレッジに入学し、学士の称号を獲得しています。

そこを修了してイングランド国教会の一派であるアングリカン・チャーチの司祭となり、一八八八（明治二一）年にイングランド国教会から宣教師として日本に派遣されます。イギリスの汽船「ロンバーディ」に乗船して長崎に到着し、そこから一旦、大阪に移動して、再度、長崎、熊本を経由して翌年一二月に神戸に到着してユニオンチャーチの牧師に就任しますが、その本業よりも熱中したのが登山でした。

イギリス本国には高山がなく、最高がスコットランドのハイランド地方にある標高一三三四メートルのペン・ネヴィスであるため、登山に興味のある当時のイギリスの人々はヨーロッパを指すのが一般でした。ウェストンも来日する以前の八八五年から八六年にかけてマッターホルンやヴェッターホルンなどに登頂していましたし、学校ではマイル競走で学校記録を樹立するほどの運動能力も発揮していました。

そのようなウェストンにとって各地に三〇〇〇メートル級の高山が存在する日本は魅力ある国土でした。神戸に定住した翌年の一八九〇（明治二三）年に九州の阿蘇山、祖母山、霧島山、日光の白根山、さらに富士山にも登頂しています。以後も、九

四（明治二七）年に一旦帰国するまでの五年間に、富士山に二度、北アルプスの槍ヶ岳に二度、笠ヶ岳に三度、常念岳、乗鞍岳、白馬岳、南アルプスの赤石岳など三三座に登山しています。

驚嘆すべきことは、これら三三座のうち、外国の人間として最初に登頂した高山が九座もあることです。このような実績が評価され、ウェストンは一八九三（明治二六）年にイギリス山岳会「アルパインクラブ」に入会が許可されました。その申請書類には九〇年から九二年にかけての三年間に日本で登頂した一六の山々が記載されています。富士山には毎年一回登山しており、そのうち一回は残雪のある五月の登頂です。

#### 一旦帰国して結婚

このように本業の布教よりも登山に熱中するウェストンを懸念した文書が存在します。日本での布教の責任者である日本聖公会のW・オードレイ主教が一九〇二（明治三五）年一月にイギリスの本部に発送した手紙に、ウェストンが登山のために頻繁に休暇を取得するので信者が不満を表明していると記載し、文末に、結婚すれば人間は変化し成長するだろうと希望を陳述していますが、これが完全な裏目になってしまします。

ウェストンは一八九四（明治二七）年一〇月に一旦イギリスに帰国し、会員となっているアルパインクラブで「日本アルプス登山と山岳信仰」について講演をするとともに、相変わらずヨーロッパアルプスのアイガー・ヨッホなどに登山をしていました。そして一九〇二（明治三五）年に貴族の家庭の次女で一〇歳年下のフランシス・エミリーと結婚しました。父親はイギリスの鉄道やアフリカの鉄橋を建設した技師でした。

ところが夫人は前述のオードレイ主教の期待を完全に裏切る女性でした。そもそも二人が出会ったのがヨーロッパアルプスの名峰ヴェッターホルンの登山の途中であり、ウェストン以上の山登りの達人でロッククライミングもこなす女性だったのです。二人は大西洋を経由してアメリカ大陸を鉄道で横断、カナダのヴァンクーバーから汽船で一九〇二（明治三五）年六月に横浜に到着し、そこで新婚生活を開始します。

二人は早速、七月に富士登山をしますが、このときは大人しい登山でした。ところが二年後の一九〇四（明治三七）年に夫婦で山梨県側の富士吉田から登山し、頂上から一七〇メートルもある噴火口の底部まで降りています。周囲を一巡する「お鉢巡り」だけでも一時間半はかかる難行ですが、これはさらに大変で、富士浅間神社の神主が「噴火口の秘密を探查した最初のヨーロッパ女性」としてメダルを贈呈したほどの快挙でした。

一九九六年に豊田市で「ウェストンのみた明治・大正の日本」という催事が開催され、一枚の写真が話題になりました。長野の戸隠山の「蟻の門渡り」(図2)は両側が絶壁で何人もが転落死している難所ですが、そこにロングスカートの女性が立っている一九〇四(明治三七)年の写真です。ウェストンが撮影した夫人の雄姿ですが、この写真の発見を契機に戸隠村(現在は長野市の一部)で「ミセス・ウェストン祭」が開催されるようになっていきます。



図2 戸隠山の蟻の門渡り



図3 槍ヶ岳

#### 四年間で一六座に登頂

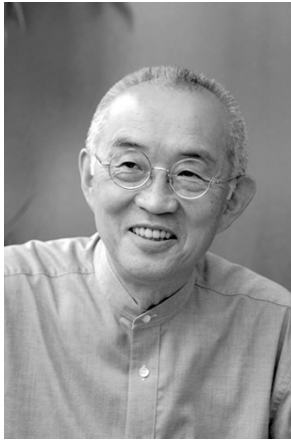
このような登山能力のある女性とともにウェストンは一旦帰国する一九〇五(明治三八)年までに一六座の山々に登頂しています。それは案内してくれる地元の人々の支援があったからですが、最大に貢献したのは上高地の猟師で依頼されれば山案内人もしていた上条嘉門次です。一九一三(大正二)年にウェストン夫妻が上高地から飛騨山脈の山々に登山するときに案内し、夫妻とともに河童橋で撮影された写真が現存しています。

夫妻は一九〇五年に帰国しますが、一一(明治四四)年に再度来日し、一五(大正四)年に帰国するまで、夫妻で一〇座以上の山々に登頂しています。とりわけ夫人は槍ヶ岳(図3)に女性としては最初の登頂に成功しています。帰国したウェストンは日本の未踏の山々を踏破し調査したことを評価され一九一七年にイギリスの王立地理学会から毎年一人しにしか授賞しない「バック・アワード」を受賞しています。

## 各地で敬愛されたウエストン

日本各地では便所も風呂も食事も和風の時代に、古来の風習を素直に受入れて旅行をしていたウエストンは各地で歓迎され、国内一五ヶ所に彫像やレリーフが設置されています。とりわけ有名なレリーフは上高地に設置されたものですが、太平洋戦争中に消滅したことがあります。金属供出運動が活発になり、敵国の人間のレリーフが供出されることを危惧した地元の人々が撤去して秘密に保管していたのです。人望があった証拠です。

前述のように「ミセス・ウエストン祭」が長野県戸隠村で開催される以上に「ミスター」ウエストン祭」は各地で開催されており、その最初は終戦直後の一九四七年に上高地で開催された「第一回ウエストン祭」です。今年（二〇二三）第七七回が戦中には秘匿されていたレリーフを復活させた記念碑前の広場で開催されています。日本のスポーツ人口で登山は六位の人気ですが、その基礎を開拓したのがウエストンなのです。



つきお よしお 1942年名古屋生まれ。1965年東京大学工学部卒業。工学博士。名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授。2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究。全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら、知床半島塾、羊蹄山麓塾、釧路湿原塾、白馬仰山塾、宮川清流塾、瀬戸内海塾などを主催し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に『日本 百年の転換戦略』（講談社）、『縮小文明の展望』（東京大学出版会）、『地球共生』（講談社）、『地球の救い方』、『水の話』（遊行社）、『100年先を読む』（モラロジー研究所）、『先住民族の叡智』（遊行社）、『誰も言わなかった！本当は怖いビッグデータとサイバー戦争のカラクリ』（アスコム）、『日本が世界地図から消滅しないための戦略』（致知出版社）、『幸福実感社会への転進』（モラロジー研究所）、『転換日本 地域創成の展望』（東京大学出版会）など。モルゲンWEBの連載「清々しき人々」より、『清々しき人々』、『凜凜たる人生』、『最新刊「爽快なる人生」（遊行社）など。